

岩日タイムズ

発行者
岩瀬日本大学
高等学校
ソーシャルメディア部
飯山 粹衣
緒方 桃子

レンズ越しに感じる力

家族の大切さを実感

浅田政志さん オンライン取材

東日本大震災から10年という節目を迎え、3.11を振り返る特別番組も多く放送された。その一方で、震災の記憶が風化しつつあることも事実である。私たちソーシャルメディア部では、震災ボランティアを経験した、写真家の浅田政志さんへのオンライン取材を行った。

浅田さんは、10年前の2011年、東北地方の被災地で写真洗浄のボランティアに携わっていた。

多くの尊い命が奪われてしまった東日本大震災、今もなお、



インタビューに答える浅田さん

昨年公開された映画「浅田家！」では、写真洗浄を行う主人公の政志とともに、彼を取り巻く人々の苦楽と家族の絆が描かれている。そこで、この映画のモデルとなった浅田政志さんにお話を

いしたところ、快諾してくれた。写真を必要とした人の思いや、写真を届け続けた人の思いを取材した。

もし一生に一枚しか撮れなかったら

浅田さんは1979年、三重県津市で生まれ、中3の時に父親がくれたカメラがきっかけで写真に目覚めた。その後、専門学校に進学して写真の技術を学んだ。学校の卒業課題は「1枚の写真で自分を表現する」というものだった。考え抜いた末、「もし一生に一枚しか写真が撮れないならば、自分の家族の写真を撮りたい」と思い、自身の思い出を再現した家族写真を撮影した。

写真集「浅田家」は、『写真界の芥川賞』とされる「木村伊兵衛写真賞」を受賞。また、東日本大震災の津波で汚れた写真の洗浄活動を撮影した『アルバムのチカラ

ラ』。これらの写真集が映画「浅田家！」の原案となる。

二宮さんが語る家族の大切さ

この映画では「写真」のほかに「家族」がキーワードとなっている。主演の浅田政志役を演じた、嵐の二宮和也さんは自身の家族についてこう語っている。

「一番は家族がこの仕事をサポートしてくれたこと。今思えば、中学1年の子どもが毎日、六本木に行って仕事をしているって、親はかなり不安だったと思う。親が送迎してくれたが、帰りの時間も不規則で、毎日、僕が帰ってくる度に本当にほっとしていたよ

2011.07.20 → 2013.10.20
アルバム
のチカラ
著 浅田政志 × 藤本智士



Zoomを使って取材する部員

という。しかし、今はどうだろうか。多くの人が外出しても、家にいても家族と顔を合わせず話すのではなく、スマホという、小さな画面上での会話が多くなっている。と聞いた

うな記憶がある。忙しい中サポートしてくれたことは本当にありがたいし、助けられたなあと思う」（シネマトゥデイより抜粋）

この作品を通して「家族」という存在の大切さに気づいた人も多いそうだ。私もそのうちの一人だ。震災時は電話の回線が止まってしまい、家族と連絡が取れず、家族の声を聞くことができた時は思わず涙した人も多くいた

震災時と同様に、コロナ禍によってこれまでの日常を送ることが難しくなりました。改めて10年前に感じたことを思い出し、あまりにも普遍的で、あまりにも当たり前な「家族」や「写真」の存在の大切さに気づく必要があるのではないだろうか。学校のみならず、当たり前前の日常の大切さに気づいてほしい。

(飯山)

「映えない」写真を 隠された力がある

浅田さんが撮影しているのは、主に家族写真。そのきっかけは専門学校の卒業課題で、一枚の写真で自分を表現するというものだった。一生に一枚しか写真を撮れないならば、家族が撮りたい。そう考えた浅田さんは自身の思い出を再現した家族写真を撮影した。それから20年以上、家族写真を撮影し続けている。

浅田さんは写真を撮影する前に被写体となる家族のもとを訪ねる。事前に話し合うことでその家族の思い出に触れ、自分にはしか撮れない写真を撮影するためだ。例えばいつも父親が撮影を担当している家族の場合は父親を中心に撮影したり、家族の思い出の場所に出向いて撮影したりと、その工夫は様々だ。



震災発生後、浅田さんは岩手県野田村で写真洗浄に出会った。当初は写真家としてではなく、ボランティアのために被災地を訪れたそうだった。人々が悲しみ、混乱している状況では写真を撮ることを無力に感じたと言った。

浅田さんが写真洗浄の現場で見た写真は、プロが撮るような技術的に工夫されたものばかりでは無かった。しかし、写真一枚一枚には撮った本人にしかわからないような思いが込められている。不特定多数が見ていいなと思ういわゆる「映える」写真よりも、何気ない日常を切り取った「映えない」写真の方が大切なものがある。浅田さんは笑みを浮かべた。

「震災後、食べ物や住み家がなく明日の生活にも困る人ばかりだった。そんな状況にも関わらず、写真を探しに訪れる人がいた。写真には隠された力があるのだ」と思った。

新型コロナウイルスの影響もあり、震災の語り部や伝承館運営者の7割が関心の低下を感じているという今。(河北新報) 浅田さんは「難しい状況を逆手にとること、今だからこそできるやり方を見つけて、チャレンジできる」と話し、その具体例としてオンライン授業を挙げた。今回スムーズに取材できたのもコロナ禍でオンライン設備が充実したおかげともいえる。今年には震災を振り返るとともに、これからの未来にも目を向ける一年となるだろう。(緒方)

編集後記

画面越しでのインタビューだったが、写真の話をしているとき、とてもこやかに話されていたことが印象的だった。特に、自身が父親になって「自分の子どもがかわいいから一枚撮りたくなるという気持ちが分かった」と話していて父親と

しての一面が見られて良かった。(塩澤) とても貴重な時間を過ごすことができた。東日本震災でのボランティア活動を聞き、当時を思い出す良い機会になった。今まで普通に生活できていたことは幸せなことだったと気づくことができ、一日一日を大切にしたいと思った。また、写真家としての活動もとても魅力的で、家族の思い出を写真に残す素敵な仕事だと思った。(高松)

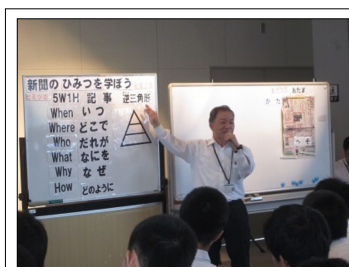
学生時代から家族写真に魅了され続けている浅田さん。写真家をやめたくなったことは一度もないという。一方で、人々の関心が薄れ、風化されていく想いもある。写真のようにモノとして存在してさえも、残り続ける努力が無ければ忘れ去られてしまうものだ。私たちそれぞれが自分の中にある思い出を忘れてはならない。(緒方)

浅田さんは、日々の日常を「ふつう」だと感じると語っていた。何気ない日常がとも身近なものだと実感することができた震災とコロナ。私は「ふつう」というものは、皆に等しく与えられるものだと思う。また、写真も誰にでも開かれたものであることから「ふつう」と写真の力には共通するものがあるのではないかと思う。日常を送ることができない今、カメラを手にとって「ふつう」を撮ることが大切なのではないだろうか。(飯山)

映画「浅田家！」は写真を通じた家族愛

元小学校長 坂場安男さん

平成28年に来校した、前茨城新聞社NIEコーディネーターで元小学校長の坂場安男氏(写真)は、年間二百本以上の映画を映画館で鑑賞。評論をメル友に発信している。今回は「浅田家！」の特集を企画。コメントをお願いしたところ、快諾していただいた。ユニークな家族写真で注目を集めた写真家・浅田政志の実話を、中野量太監督が脚本・映画化した。政志を二宮和也、兄を妻夫木聡、父が平田満、母が風吹ジュンと適役。政志が「あと一枚しか写真が撮れなかつ



た。何を撮る？」課題で撮った「家族の夢写真」が認められ、苦勞の末出版。家族の夢を叶える撮影の仕事に独立。家族の笑顔を演出する政志の写真に、家族愛を感じて、胸がジーンときた。政志は、東日本大震災の被災地を見て写真を撮れなくなる。被災した写真を洗って持ち主に返すボランティアをする中、父を失った少女の家族写真を依頼される。父の愛を感じとった政志の家族写真に心が震えた。